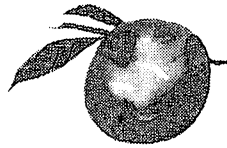


加藤辨三郎 述

# 浄土和讃

13

文責 本誌編集部



光とは智慧

九番目の和讃を拝読いたします。

道光明朗超絶せり

清浄光佛とまふすなり

ひとたび光照かふるもの

業垢をのぞき解脱をう

このご和讃の佛さまは清浄光佛です。十番目は歓喜光佛、十一番目は智慧光佛です。この清浄、歓喜、智慧光とは、

『正信偈』でも「清浄歓喜智慧光」といったように、三句いっしょになって詠われています。

法蔵菩薩が四十八願をお立てになり、その願が成就するようになんげ修行をつづけ、修行が成就して、法蔵菩薩は阿彌陀佛におなりになった。阿彌陀佛は、無量寿・無量光の佛で、『大無量寿経』には、無量寿佛とあり、無量寿佛の光に、十二の光があると書かれ、その光が十二ならんでいます。そこに清浄、歓喜、智慧と三つ重なっています。わたしたちの根本の煩惱は、貪瞋痴で、その貪は貪欲で、

貪欲の最たるものは愛欲です。それは釈尊ご自身、また釈尊の教団のお坊さんたちも、これの克服にもっとも苦勞されました。佛さまも佛さまの教えも、その母胎は、わたしたち凡夫の煩惱なのです。凡夫が煩惱のためにさいなまれて苦しんでいる苦惱、それが土壤となり、それが大地になって、そこから佛もあらわれたもうし、佛の教えも出ているのです。

佛教を学ぶのに、いきなり佛とは何ぞや、法とは何ぞやと、そのように学ぶのも、悪いとはもうしません。だが、それよりもっと適切なのは、煩惱に気づくこと、それは他人の煩惱ではなく、自分自身の煩惱がいかに深いか、これがわれわれとしては、なかなか捨てられない、その現実の気がつく、目覚めることが大事なのです。それを目覚めさせ、つまりそれが如来の光です。如来の御智慧です。光とは智慧です。これは親鸞聖人も、光とは智慧の形である、また逆に、智慧は光の形であるとお説きになっていられるのです。

如来の光が目覚めさせるところの煩惱の代表が、貪欲と瞋恚と愚痴です。これは無明、つまり愚かであって、道理がわからないことです。道理がわからないから愚痴をいっ

ている、道理がわかったら愚痴なんかいいません。ですから真理が明らかにわからないことです。そこで如来からいえば、その貪瞋痴を、いかにして目覚めさせてやるか、わたしたちからいえば、目覚めさせていただいて解脱を得る。それがわたしたちの究極的な願いでもあり、目標でもあるわけです。

#### 無碍光佛のひかり

そういう意味で、十二の光が説かれています。もちろん十二の光それぞれな意味が深く尊い。なかでも、この清浄、歓喜、智慧の三光を、親鸞聖人は重要視していられる。その証拠には、『浄土和讃』のうちの「大経意」という『大無量寿経』の心持ちをお詠みになったご和讃が出てきます。そのなかに、

無碍光佛のひかりには

清浄、歓喜、智慧光

その徳不可思議にして

十方諸有を利益せり

というご和讃があります。これを見てもわかるように、

十二光のうちの総代表は無碍光であるというのが、親鸞聖

人のおこころもちだとおもわれます。

なぜ親鸞聖人が、十二の光のなかで、無碍光を代表的な光としてお取りになったか。天親菩薩の『浄土論』の一番最初にでておられるお言葉、尽十方無碍光如来によっていられるのは明らかです。そればかりでなく、『教行信証』の「行の巻」には、真実の行とは、無碍光如来のみ名を称えるのだと出ています。それほど親鸞聖人は、この無碍光如来あるいは無碍光佛を根本的な光と受け取っていられます。直接には天親菩薩の尽十方無碍光如来があるからでしょう。同時に、如来の光の前には、われわれの煩惱は妨げにならない。その意味で無碍という。だから無碍光とは、この上もないありがたい光です。

何といっても、この血が通っている間は、愛欲も捨てられない。瞋恚の心も捨てられない。愚痴も磨らない。それが凡夫というものです。わたしたちはお互いに凡夫です。臨終の一念まで、わたしたちの煩惱は磨らないというのが、親鸞聖人の根本的な自覚です。ところが、その凡夫の本性的ともいう煩惱が、無碍光如来のみ前では、妨げにならない。煩惱そのまま、しかも悟りの道へ行くのです。その力がある光、それが無碍光です。

ゆえに「無碍光佛のひかりには」と、ご和讃に詠まれています。その無碍光佛の光には、清浄、歓喜、智慧光があるのです。

わたしたちは、太陽の光を白光とっています。太陽の光は、色それ自身を見ることはわたしたちにはできません。もし強いて表現をすれば、色のない光で、白い光です。物理学でも白光という言葉を使います。白いという色もない光だが、あの白光がプリズムにかけられると、たちまち七色があらわれます。けれども七つの色といっても、代表的な色で、物理学では、あれは波長、つまり光の波といえます。その波の長さによって、赤く見えたり、青く見えたりするわけです。そして赤く見えたりする波長の外にまだ光があるのです。赤の外の光を赤外線といいます。ちょうど虹が七色になっているが、波長も、赤から始まって七色になり、その最後は紫です。だがその紫でおしまいはなく、実際に光は、まだ紫の外にもある。それは紫外線だということです。ですから、結局は九つに分けることができるのです。赤外線あり、それから赤から始まって紫まで七色があって、そして紫外線があるのです。しかし、もともとそんな光が別々にあるのではなく、あるのは色のない総合された

光、強いて文字で書けば白光というしかない。それが太陽の光です。

### 三垢消滅す

この太陽の光を思うと、親鸞聖人が無量寿佛の光、あるいは無碍光佛の光を、十二にお分けになっているところがよくわかるのです。それは角度を当ててごらんになるわけです。白光も角度を当てると赤に見えたり、紫に見えたり、黄色に見えたりするのです。無碍光如来の光も、至るところに届くし、区別はなく一如平等です。

けれども、わたしたちの貪欲の深い、愛欲の道を捨てることのできない、その煩惱のプリズムに当てたときにあらわれるのが、この清浄光佛と仰がれる清らかな光です。その清らかな光に、こちらのどろどろした濁った姿が照らされて、初めて気がつく。気をつかせるのは、反対の光でなくは気がつきません。それは清浄光佛なのです。また歓喜光佛は、腹立ちの心が靡らないという自覚をせしめる光です。それは喜ばせるところの光です。そして、自分ほど愚かな者はない、自分は何らの智慧もない、その自覚を与えてくれるのが智慧光、つまり智慧光佛です。

そういう意味で、この清浄、歓喜、智慧の三光は、貪瞋痴を照らすところの三光であります。わたしたちが、いかにこの三毒に苦しみ、三毒に悩んでいる本人であるかを自覚させてくださる光です。

しかし『大無量寿経』を読むと、十二の光を、並べて書いてあって、その後「それ衆生ありて、このひかりにまふあふものは、三垢消滅し」と書いてあります。この三垢は三毒と同じことで、貪瞋痴です。つまり十二の光にわれわれが遇わしていただくと、われわれの三垢が消滅する、貪瞋痴の根本煩惱のあかが洗い落されるのです。

ご和讃には、「清浄光佛とまふすなり」とおせられ、その清浄光佛の光が、「道光明朗超絶せり」と詠われています。道光は佛になる道の光といってもいいし、佛の光といってもいいでしょう。親鸞聖人は、道光というのは、阿弥陀如来の光だと教えてくださっています。明朗超絶とは、阿弥陀さまの光は、非常に明らかであって、愚痴を照らすのです。また欲望を隅から隅まで、くまなく照らす力があるのです。わたしたちのどんな細かい欲望でも、如来は、ちゃんと知りましたものです。

わたしたちは、なにか思ったり、したときに、まま、こ

のぐらいのことはわからないだろうと、おもうことがあります。それによって、人さまはだまされるか知れませんが、如来だけはだますわけにはいきません。それは、各自で反省してごらんになれば、よくわかります。わたしたちが、たとえばなにか極秘で、自分ひとり悪巧みをします。いくら極秘にひとりでもやっても、ちゃんと本人は知っているのです。本人が知っているというのは、本人が二人いるわけです。悪巧みをするのも自分です。お前また悪いことを考えたなど知らずのもわたしなのです。ただし、そのときのわたしは、如来から賜ったところのわたしです。また悪いことを考えたなど知らずのを、大我といわれたり、いろいろな言葉がありますが、大我とは智慧が大きくなる、つまり如来の光なのです。だから如来の光は、わたしどもの煩惱の真ん中まで照らしているのです。とくに無碍光とおおせになるときは、地獄のかまの下までも照らさざるはないということなのです。

『大無量寿経』の三垢消滅の言葉のあとに、三悪道、つまり地獄、餓鬼、畜生の道で悩み苦しんでいる者も、この光に遇ったならば「身意柔軟」になると書かれています。地獄へ落ちて苦しんでいる者のところへ、ちゃんと如来の

光が差し込んでくださいます。光が差し込むと地獄の真ん中で苦しんでいるまま、しかも身意柔軟、つまり身も心もやわらかくなるのです。だから、腹が立ってしようがないという、これは修羅道でしょう。そこへ、如来の光がスッと差し込んでくださると、ああ、そうだったか、悪いのはこつちだと、こういうふうになって、身も心も柔軟になってくるというのです。

その箇所を読んで見ましょう。「それ衆生ありて、この光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟なり。歡喜踊躍して、善心生ず」。そしてそのつぎ「もし三塗勤苦の処にありても、この光明を見れば、みな休息を得て、また苦悩なし」さらに「皆解脱を蒙る」とあります。

つまり、地獄餓鬼畜生の苦しみの真ん中にいても、そこへ光明が差しきて、この光明を仰ぐことができれば、みな安らかな心を得て、苦悩はおのずから消滅していくのです。そして、だれも彼も悟りが開けてくるのです。

『大無量寿経』では、わたくしにとつて、たいへんわかりやすいのは、五悪段とか三毒段ですが、この十二光のところもわかりがよく、なるほどそうですねと、すぐ感じるところなのです。

(在家佛教協会前理事長・協和醱酵工業元社長)